

スタンフォード海外研修報告書

茨城県立医療大学 保健医療学部
原 秀剛

本学会から研修助成の下，Stanford University，Department of Radiology “Summer Symposium on State of the Art Imaging”（米国・カリフォルニア州スタンフォード）に，7月22日～7月29日の旅程で参加させて頂いた。

1. 期待していたこととその結果

現在，脳卒中における撮像から画像処理（Computer-Aided Diagnosis）までの総合的なシステム開発を研究テーマとして取り組んでいる筆者にとり，Session：Neuroradiology，Image Processing for Clinical Imaging 等の予定されている Lecture は魅力的に感じた。

また，Stanford に留学経験のある医師に，臨床と研究を学ぶ目的には最適な環境であることや医学系教育プログラムが最も進んでいる University である情報も事前に得ていた。

以上から，研究・教育の両面に関しての Process を学ぶことを期待して臨んだ。

結果，上記の期待に充分すぎる程の解答が得られたことは言うまでもない。Topics として 7T MRI が，今後の Imaging 技術，医学界に及ぼす影響は計り知れない予感がした。

2. 診療放射線技師から見た日本と米国の違い

米国では，大前提として分業制が浸透している。すなわち専門分野においての棲み分けが確立していることになる。医学においても研究と臨床（病院）は全く別ものであり，日本のように，病院業務と研究を遂行する診療放射線技師は皆無に等しい。ある意味，Americanized され良くも見えるが，臨床を通して研究を行う Style の筆者を含めた日本の医学者には物足りない環境であるように感じる。

3. もっとも印象に残ったこと（セミナーとイベント）

* セミナー： Department of Radiology chairman である Gray M. Glazer, MD による “Forging The Future of Imaging” と題した Lecture から，「Imaging 技術は今後もさらに発展していくだろうが，現在ある Tool の活用次第でもっと大きな発見がある」という件から，Image Processing においても共通することが見え，筆者の研究の方向性は truth へ向かっていることを再確認した。

* イベント： すべて印象深く甲乙付けがたい。研修期間中の Topics を以下列記する。

“Night lecture (& Beer), Giants Game, Cal train へ全力疾走!, Shopping & 迷子, San Francisco Tour, ゲイ, Flight cancellation, Hilton 水難事件, 無呼吸症候群, 成田の恋? ”

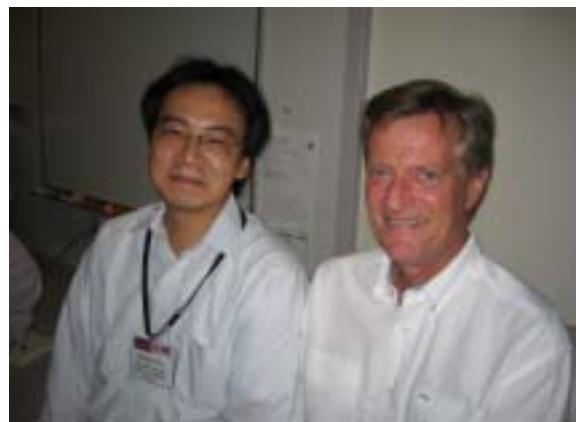
4. 今後の海外研修のあり方

本研修は Stanford University 正規の教育プログラムである。ご高名な先生方の Lecture に耐えうる知識を兼ね備えた人材が適任である。すなわち 30, 40 歳代を中心としたモチベーションの高い人材の選任が必要であろう。しかし，若手の研究への動機づけには最良の研修機会でもある。今後は Lecture の内容をもう少し高いレベルにして頂くことを望む。

以上，本助成による Stanford 研修は，研究・教育両面において大変有意義な情報収集となり，筆者の研究の発展に対して意義深いものであったことを報告する。

最後に，本研修の機会を与えて頂きました日本放射線技術学会小寺会長はじめ学術交流委員会の皆様ならびに学会先輩諸氏に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

また，多大なるご支援を頂きました GEYMS 関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



Course Director Dr. Moseley(右)と筆者(左：ちょっと疲れ気味)
3T - MRI 実験中に一休み一休み . . .